

幼児教育史学会

第11回大会プログラム



「鞆の浦」ふくやま観光・魅力サイト
<http://www.city.fukuyama.hiroshima.jp/site/sights-spots/31144.html>

2015年12月5日（土）

福山市立大学

プログラム

【受付】 9:30～ 研究棟 2階 中講義室 C 前

【自由研究発表】 10:00～12:30 (中講義室 C)

司会 : 小 玉 亮 子 (お茶の水女子大学)
吉 長 真 子 (福山市立大学)

1. 10:00～10:30 戦前の「ツバメノオウチ」からみた「保育」「国民保育」との接点

発表者 : ○棚 橋 美代子 (元 京都女子大学)
堀 田 浩 之 (幼児発達研究会)
浜 崎 由 紀 (京都光華女子大学・非常勤)

戦前の「観察絵本キンダーブック」は、1927 (昭和 2) 年 11 月にフレーベル館から刊行された。「観察絵本キンダーブック」には、「はさみ込み」や附録として額絵・「ツバメノオウチ」が添付されていた。また同社では 1929 (昭和 4) 年 1 月に、保育者向け冊子の「ホイクタイムス」が刊行されている。「ホイクタイムス」に関しては資料が断片的で、全体像は明らかではないが、1932 (昭和 7) 年 4 月に創刊された雑誌「ツバメノオウチ」は「ホイクタイムス」の巻号を踏襲していく。

しかし、フレーベル館の経営方針である直接販売制度や内務省の浄化運動の影響を受け、附録としての「ツバメノオウチ」は形を変える。部分的には「はさみ込み」となり、雑誌としての器は保育雑誌「国民保育」(国民保育協会・編・発行)に移行する。さらに戦時下の厳しい状況のなかで、会社の休業準備も始まり、「国民保育」は保育雑誌「保育」(全日本保育聯盟)に統合していく。

今回の報告は、「ツバメノオウチ」を基点にして「国民保育」から「保育」に統合していく過程を考察する。

2. 10:30～11:00 総力戦体制下の保育雑誌に見られる「国民保育」論

——『国民保育』誌の創刊号を中心に——

発表者 : 浅 野 俊 和 (中部学院大学)

総力戦体制下の保育界では、それぞれの組織・団体や個人が競うように「国民保育」論を唱え、多様な活動を展開している。「日本幼稚園教育協会」編集・発行の『幼児の教育』誌などでは倉橋惣三が「国民幼稚園」論を展開し、「保育問題研究会」は唯一の年報『国民保育のために』(帝国教育会出版部、1942年)を編集した。そのような状況の中にあって、「国民保育」の言葉を前面に押し出した「国民保育協会」が結成され、1940 (昭和 15) 年 12 月には、同会編集による保育雑誌『国民保育』(フレーベル館 (のちに日本保育館と改称) 発行、1943 年 5 月号 (第 3 巻第 5 号) まで刊行が確認) も創刊されている。『国民保育』誌が新たに刊行されたことの意味は、いったい何であったのか。本発表では、今回発掘した同誌の創刊号を取りあげ、その誌面に見られる「国民保育」論を整理・検討することで、総力戦体制下における保育界の動向の一端を示してみたい。

3. 11:00~11:30 戦時下における文部省主催「母の講座」
——奈良女子高等師範学校に着目して——

発表者：森岡伸枝（大阪芸術大学短期大学部）

本発表では、1930年代から1940年代にかけての文部省主催「母の講座」（委嘱先 奈良女子高等師範学校）について、その前身の「成人教育婦人講座」との比較を行う。発表者はこれまで1920年代の「成人教育婦人講座」について、文部省と委嘱先との間で、講座の内容や受講者像にズレが生じていたことを明らかにしてきた。では、1930年代以降の「母の講座」については、同様のことがいえるのだろうか。

ところで、本発表と密接に関わる先行研究は山村淑子「戦時期における母性の国家統合--文部省『母の講座』を中心として」（『総合女性史研究』(21)、2004年）、奥村典子『動員される母親たち—戦時下における家庭教育進行政策—』（六花出版、2014年）である。これらは戦時体制の形成における「母の講座」の役割を分析する上で大変参考になった。だが研究趣旨が異なるため、発表者の問題関心について詳細には明らかにされていない。

なお、本発表はJSPS科研費（課題番号：24730690）の助成を受けたものである（「戦前・戦中の女子社会教育政策の変容～「成人教育婦人講座」から「母の講座」へ～」）。

4. 11:30~12:00 『幼稚園のための指導書 音楽リズム』（昭和28年）の音楽傾斜（2）
——昭和24年10月以降の刊行経緯から——

発表者：田邊圭子（北陸学院大学）

本発表は、昭和24年10月以降の文部省による幼稚園教育課程や幼児指導要録作成の動き及びその中で「リズム」、「動きのリズム」の取扱いを中心に検討することを通して、『幼稚園のための指導書 音楽リズム』が音楽に傾斜した背景について考察を試みるものである。

「教育課程審議会総会議事録」（昭和24年12月）から、文部省が幼稚園の教育課程を小学校との関連において考えていたことや、『保育要領』の「リズム」を小学校の「音楽」に連なるものとして認識していたことが窺えた。

「幼稚園教育課程研究協議会」（昭和25年2月）では、「動きのリズム」に対して参加者の十分な理解が得られなかったことが推察された。

以上の点等から、文部省が幼稚園の教育課程を小学校との関連において考えていたことや、昭和27年以降の文部省の姿勢の変化、「動きのリズム」に対する現場の理解が十分浸透しなかったこと等が音楽傾斜の背景として考察された。

12:00~12:30 全体討論

【昼食】 12:30~14:00

【シンポジウム受付】 13:00～ 研究棟 2階 大講義室前

※学会参加者用受付と公開講座（一般）受付は別になっています。大会に午後から参加される場合は、学会参加者用受付のほうで、参加費のお支払いとご記名をお願いいたします。

【シンポジウム（公開講座）】 14:00～16:30 （大講義室）

テーマ：

日本における幼児保育の新しい潮流——倉敷さつき会保育所「若竹の園」の成立——

提 案 者： 宍 戸 健 夫（愛知県立大学 名誉教授）

提 案 者： 高 月 教 恵（福山市立大学）

司会・指定討論者： 湯 川 嘉津美（上智大学）

趣旨説明：

倉敷の美観地区の片隅に、コテージ風のなんともおもむきのある園舎がある。これが「若竹の園」である。1925（大正14）年に、大原孫三郎（1880－1943）が西村伊作（1884－1963）に設計を依頼して建てられた保育所である。経営母体は修養教化団体「倉敷さつき会」、保育所「若竹の園」に直接関与したのは、大原孫三郎の妻大原壽恵子である。美観地区は、倉敷紡績株式会社を1907（明治40）年に父親からひきついで社長になった大原孫三郎の経営理念—「労働理想主義」と「共同作業場」理念—の体現物だということができる。今はホテルになっているレンガ造りの紡績工場や、大原美術館や倉敷民芸館、倉敷中央病院など、そして「若竹の園」もその一つである。

本シンポジウムでは、この保育所の設立理念、保育の実際について考察し、日本の幼児保育の歴史の中で「若竹の園」の成立はどのような意味をもつのかについて提案したい。大正デモクラシー期の倉敷で試みられた「養育の社会化」は、現在そして今後の日本の保育（保育政策、保育内容・方法）に重要な示唆を与えると考えられるからである。

参考文献：

- ・ 宍戸健夫『日本における保育園の誕生—子どもたちの貧困に挑んだ人びと—』新読書社、2014年
- ・ 高月教恵「保育所「若竹の園」と大原孫三郎の経営理念」安川悦子・高月教恵編著『子どもの養育の社会化—パラダイムチェンジのために—』御茶の水書房、2014年
- ・ 高月教恵『日本における保育実践史研究—大正デモクラシー期を中心に—』御茶の水書房、2010年

【総会】 16:45～17:30 （大講義室）

【懇親会】 18:30～20:30 （農家食堂ルオント：福山市三之丸町4-12）

連絡先： 幼児教育史学会 第11回大会実行委員会

〒721-0964

広島県福山市港町2-19-1 福山市立大学 吉長真子研究室気付

Phone： 084-999-1111（大学代表）・084-999-1100（研究室直通）

E-mail： n-yoshinaga@fcu.ac.jp